

日本を誇りある独立国家として存立させるため、安全保障分野などで評論活動を続けてきた麗澤大学客員教授で情報史学研究家の江崎道朗氏(61)らが受賞した7日の正論大賞贈呈式。ビデオメッセージを寄せた岸田文雄首相は「(受賞した3氏の論考は) いずれもわが国の今後の重要課題に対する示唆に富んでいる」などと功績をたたえ、祝意を表した。

(1面参照)

撮影) 正論大賞贈呈式に出席した(左から)江崎道朗氏、阿古智子氏、田久保忠衛氏
7日午後、東京都千代田区(酒巻俊介)



正論大賞贈呈式

阿古氏 強権的な中国に警鐘

新風賞受賞の東京大学教授、阿古智子氏(52)は新疆ウイグル自治区での弾圧政策や、強権的な立法を進める中国について「民主主義を破壊する甚大な力を持ち、適切に制御できなければ世界秩序が大きく変えられる可能性がある」と警鐘を鳴らした。その上で「中国などの友人は、他者に支配されることを明確に拒絶している。今後も人間として感じる痛みや喜びを、自分の感覚と言葉で表現していきたい」と抱負を語った。

特別功労賞を受けた杏林大学名誉教授の田久保忠衛氏(1月に死去)は、知米派の外交評論家として活躍し、平成8年には第12回正論大賞を受賞していた。長男の壮輔氏は「朝起きてから寝るまでのほぼ全てを言論と研究に費やしていました。喜び笑っているに違ありません」と謝意を述べた。また、本紙正論欄での絶筆となつた令和5年12月7日付の「キッシンジャー氏の死去に思う」に触れたが、執筆時には目に力が戻り、筆が走っていた。エネルギーを頂いていた」と振り返った。